［修士論文要約］

「海の奇跡」における創造と逆説の神学
–出エジプト記14章の研究–

坂　口　由　起

はじめに

2019年末から始まった新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、教会は大きく揺さぶられた。この出来事は私に大きな疑問を投げかけた。私には聖霊が宿っているはずなのになぜ恐れるのか、なぜ神を信頼できないのか、私は神を信じていないのではないか。

パンデミックが起こる数ヶ月前、2019年9月に召天された大住雄一先生が、かつて東日本大震災を経て書かれた論文に「信仰者は、『神を信じられない』ということも、その信じられない神に向かって表明し、信じられない神の前から去らないものである。」[1)]と記されている。大住先生の言葉は真実であり、慰めであった。パンデミックが長期化する中、2022年4月には本間敏雄先生が召天された。茫然として、本間先生から頂いた『創造と堕落』という本を開くと、こう書かれていた。

> 『神は天と地とを創造された。』これを信ずるならば必ず主の奇跡、或いは贖罪、或いは他のことを信ずることが出来ます。[2)]

この言葉は、イザヤがバビロン捕囚期のイスラエルの民に向かって「神ヤハウェは創造主である」と繰り返し語ったことを想起させる。そしてこの捕囚と

いう絶望の中で書き記された文書が、出エジプトの物語である。捕囚期の神を信じられない者に向けられた言葉は、今の私たちにこそ必要な言葉なのではないだろうか。

本稿では、出エジプト記14章「海の奇跡」の神学的主題について考察し、出エジプトにおける神の救いの意義について考えたい。14章のテキストは複雑であり、文書仮説で解釈されてきた歴史があるが、今日このテキストを説得的に説明しているものは少ない。14章の神学的主題を考察するためには、祭司文書（P）の神学に手がかりがあるのではないかと考える。その為、同じ祭司文書である創世記との比較を中心に、Pの神学について考察する。更に、捕囚期の状況を反映して14章のテキストの再解釈を行うことにより、「海の奇跡」の神学を探究したい。

第1章　テキスト研究と文献学的考察

1. 私訳[3)]

2. 訳注・本文批評的注

20節「雲と闇があり、御使いは夜に光をもたらした」[4)] の文献学的考察を行う。יָאֵר は אוֹר「光をもたらす」のHiphil・未完了・三人称男性・単数形であるため、主語を「神の御使い」とも「雲の柱」とも解せる。Rashiは主語を「雲の柱」とし、「雲はイスラエルに対しては輝くが、エジプトに対しては暗い」[5)] と解している。一方でフランシスコ会訳は、主語を「御使い」と解し、「み使いは夜を照らした」[6)] と訳している。14章より前で「御使い　מַלְאַךְ」が使われているのは3章2節の1回のみであり、御使いの出現と共に炎がもたらされている。その後14章19節では、御使いが陣営の前から後ろへ移動したことによって、雲の柱も移動して光がもたらされる。これらの文脈から考えると、御使いと共に炎があり、光をもたらしたと考えられるため、私見では主語を「神の御使い」と解する。

3. 出エジプト記14章の研究史と本稿の立場

3.1 文書仮説

モーセ五書の著者は伝統的にモーセであるとされてきたが、歴史批判的方法によって異なる時代に書かれた数多くの資料を一つに編集したものであると考えられるようになった。最も長きにわたって五書研究を支配したのは、J. ヴェルハウゼンの文書仮説である[7)]。

ヴェルハウゼンはJEDPという4つの文書を考え、これらの文書をこの順序で歴史的に位置づけた。文書仮説では五書に織り込まれている資料を神名の違いから区分し、神名「主＝ヤハウェ」と呼ぶ資料を「ヤーヴィスト（Ｊ）」、「神＝エローヒーム」と呼ぶ資料を「エローヒスト（Ｅ）」「祭司文書（Ｐ）」と呼ぶ[8)]。年代はヤーヴィストを紀元前9世紀、エローヒストを紀元前8世紀、祭司文書を紀元前5世紀とした[9)]。

M. ノートは、出エジプト記にはJ、E、Pの3つの文書資料があると考えた。ノートはJ、Eを古い資料とし、Jはダビデ・ソロモン時代に位置づけられ、Eは不明瞭で年代も確かではないが、Jとは別に成立したJに並行する長い一続きの作品であると考えている。このJ、Eと全く異なるのがPである。Pの成立年代は捕囚期末期か捕囚後初期であり、全叙述が過越の生贄のための指示や、安息日という創造の秩序の啓示、モーセが受けた聖所の作成と正当な祭儀創設についての指示などに向かって進んでいると考える[10)]。

文書仮説に対してR. レントルフは、とりわけその筆頭資料であるヤーヴィストに関して神学的なまとまりはなく極めて矛盾に満ちたものであり、諸資料の存在を想定することは五書生成の理解には何の貢献もなし得ないと痛烈に批判した[11)]。

レントルフが言うように、諸資料が存在したという仮定についてはその根拠が乏しく、蓋然性が低いと思われる。特にJとEに関してはその区別が曖昧であり、神名の違いによって分けることは困難であると言わざるを得ない。Pについてはノートが言うように、祭儀規定や契約、系図に関心があることが顕著であるため、祭司文書と呼ばれる文書層があることは間違いないと思われる。

文書仮説が有効であるかどうか、出エジプト記14章のテキストによって考察してみたい。

3.2 出エジプト記14章と文書仮説

M.ノート[12]は14章を以下のように3つの文書に分けて考えている。

P；14:1-4, 8, 9a β b, 10ab β , 15-18, 21a α b, 22, 23, 26, 27a α , 28, 29
J；14:5b, 6(7), 9a α , 10b α , 13, 14, 19b, 20, 21a β , 24, 25b, 27a β b, 30, 31
E；14:5a, 6(7), 19a
※14:11, 12, 25aはJかEかは不確かである。

まず初めに気がつくのは、上記の区分では14章は神名によって識別できていないということである。14章において神名は、19節に「エローヒーム אֱלֹהִים」が一度使われているだけで、その他は全て「ヤハウェ יְהוָה」と記されている。文書仮説では神名「ヤハウェ」が用いられるのは本来Jであるが、Pが大部分を占める14章において神名が「ヤハウェ」であるという矛盾が生じている。また、19節の「エローヒーム」は「神の御使い מַלְאַךְ הָאֱלֹהִים」として用いられている。つまり、ここでは「エローヒーム」は神名としてではなく、「御使い מַלְאַךְ」の修飾語として使われているのであり、19節前後の神名が「ヤハウェ」であるからといって19節のみが別の資料であるとは考え難い。次に、19節全体についても見てみよう。

14:19a וַיִּסַּע מַלְאַךְ הָאֱלֹהִים הַהֹלֵךְ לִפְנֵי מַחֲנֵה יִשְׂרָאֵל וַיֵּלֶךְ מֵאַחֲרֵיהֶם (E)
14:19b וַיִּסַּע עַמּוּד הֶעָנָן מִפְּנֵיהֶם וַיַּעֲמֹד מֵאַחֲרֵיהֶם: (J)

ノートによれば、19節は上記のように19aはE、19bはJの二つの資料に分かれる。19aでאֱלֹהִים「エローヒーム（神）」という語が使われているためE、19bではシナイ伝承に由来すると考えられる עַמּוּד הֶעָנָן「雲の柱」という語が使われているためJとしているのである[13]。しかし、先に述べたようにエローヒームは神名として使われ

ているのではないため、19節を2つに分ける必要はないと思われる。また19節a、bは、いずれも וַיִּסַּע「そして進んだ」という同じ言葉を繰り返しているため、一つの文章であると考えるべきだろう。更に14章全体を見ると、下記の特徴的な語彙がJ、Pに関係なく用いられていることがわかる。

שׁוּב「戻る」；14:2(P), 26(P), 27a β (J), 28(P)
רָדַף「追う」；14:4(P), 8(P), 9a α (J), 23(P)

このように、出エジプト記14章を文書仮説によって区切ることに十分な根拠を見出すことはできない。従って、本稿は文書仮説ではなく、最終形態にて14章の神学的主題を考察したい。尚、最終形態については3.1で述べたように、出エジプト記は祭儀的な関心が強いことが明らかであるため、祭司によって編集されたものと考える。祭司文書と呼ばれる文書層について、関根正雄は成立をバビロン捕囚期（前587-539年頃）とする[14)]。左近淑によれば、最近は欧米を中心に相当数の学者が捕囚期と考えていると言う[15)]。

以上の議論を踏まえ、本稿の立場としては、14章全体が「祭司文書」すなわちバビロン捕囚期に祭司が編纂し、文書化されたものと想定し、神学的主題を考察する。

第2章　構造分析

〈表1〉

14:4　私はファラオの**心を頑なにし**、彼は彼らの後を追う。《頑な》
ファラオと彼の全ての軍隊において、**私は栄光を現す**。《栄光》
エジプト人は**私がヤハウェであることを知るようになる。**《神認識》

14:10　彼らは非常に**恐れた**。《恐れ》
イスラエルの息子たちはヤハウェに向かって叫んだ。
（イスラエルの民、モーセに向かって不満・つぶやき）
14:13　**恐れるな**。しっかり立て。
今日ヤハウェがあなた方のために行う**救いを見よ**。《救い》

14:16　あなたはあなたの杖を上げ、海に向かってあなたの手を伸ばし、
海を裂きなさい。《裂く》

14:17　私がエジプト人の**心を頑なにする**ので、彼らは後ろからやって来る。《頑な》
私は、ファラオと彼の全ての軍と戦車と騎手たちに**栄光を現す**。《栄光》
14:18　エジプト人は**私がヤハウェであることを知るようになる**。《神認識》

中心

14:19　イスラエルの陣営の前を進んでいた神の御使いは離れて、彼らの後ろから進んだ。すると雲の柱は彼らの前から離れて、彼らの後ろに立った。
14:20　エジプトの陣営とイスラエルの陣営の間に雲の柱は来た。**雲と闇があり、御使いは夜に光をもたらした。**《裁き・救い》

14:21　モーセは彼の**手を海に向かって伸ばした**。《手》
ヤハウェは一晩中強い東風で海を退けて、海を**乾いた地にした**。
水が裂かれた。《裂く》

14:22　イスラエルの息子たちは**海の真ん中の乾いた地に来た**。
その水は、彼らのために**右と左に壁となった**。

14:27　モーセは**海に向かって手を伸ばした。**《手》
するとその海は朝になる頃、元に戻った。
ヤハウェはエジプト人を海の真ん中に投げ入れた。

14:29　イスラエルの息子たちは**海の真ん中の乾いた地を歩いて行った**。
彼らのために、その水は**右と左に壁となっていた**。

結論

14:30　ヤハウェはその日、イスラエルを**エジプト人の手から救われた**。《救い》
イスラエルはその海辺で、エジプト人たちが死んでいるのを見た。
14:31　イスラエルはヤハウェが**エジプト人に行われた偉大な手を見た**。《手》
民はヤハウェを**畏れた**。《畏れ》
彼らはヤハウェと彼の僕モーセを**信じた**。《信仰》

〈表1〉は14章において繰り返される言葉を抽出し、構造を考察したものである。

第一に、14:4と14:17-18が「心を頑なにする（a, a’）」「栄光を現す（b, b’）」「私がヤハウェであることを知る（c, c’）」という同じ表現が繰り返されており、枠組みとなっている。

《枠組み》

14:4 וְ [a] חִזַּקְתִּי אֶת־לֵב־פַּרְעֹה וְרָדַף אַחֲרֵיהֶם [b] וְאִכָּבְדָה בְּפַרְעֹה וּבְכָל־חֵילוֹ
[c] וְיָדְעוּ מִצְרַיִם כִּי־אֲנִי יְהוָה וַיַּעֲשׂוּ־כֵן׃

14:17 וַאֲנִי הִנְנִי [a'] מְחַזֵּק אֶת־לֵב מִצְרַיִם וְיָבֹאוּ אַחֲרֵיהֶם [b'] וְאִכָּבְדָה בְּפַרְעֹה וּבְכָל־חֵילוֹ
בְּרִכְבּוֹ וּבְפָרָשָׁיו׃

14:18 [c'] וְיָדְעוּ מִצְרַיִם כִּי־אֲנִי יְהוָה בְּהִכָּבְדִי בְּפַרְעֹה בְּרִכְבּוֹ וּבְפָרָשָׁיו׃

上記の枠の内側には、後半の出来事へとつながる用語が語られる。14:10「恐れた」は31節に、14:13「救いを見よ」は30節に、14:16「海を裂きなさい」は21節に対応している。

第二に、14:21と14:27が「海に向かって手を伸ばした（d, d’）」という言葉によって対応しており、また14:22と14:29が「海の真ん中の乾いた地（e, e’）」「右と左に壁となった（f, f）」という言葉によって対応している。

《対応関係》

14:21 [d] וַיֵּט מֹשֶׁה אֶת־יָדוֹ עַל־הַיָּם וַיּוֹלֶךְ יְהוָה | אֶת־הַיָּם בְּרוּחַ קָדִים עַזָּה כָּל־הַלַּיְלָה
וַיָּשֶׂם אֶת־הַיָּם לֶחָרָבָה וַיִּבָּקְעוּ הַמָּיִם׃

14:27 [d'] וַיֵּט מֹשֶׁה אֶת־יָדוֹ עַל־הַיָּם וַיָּשָׁב הַיָּם לִפְנוֹת בֹּקֶר לְאֵיתָנוֹ וּמִצְרַיִם נָסִים לִקְרָאתוֹ
וַיְנַעֵר יְהוָה אֶת־מִצְרַיִם בְּתוֹךְ הַיָּם׃

14:22 וַיָּבֹאוּ בְנֵי־יִשְׂרָאֵל [e] בְּתוֹךְ הַיָּם בַּיַּבָּשָׁה [f] וְהַמַּיִם לָהֶם חֹמָה מִימִינָם וּמִשְּׂמֹאלָם׃

14:29 וּבְנֵי יִשְׂרָאֵל הָלְכוּ [e'] בַּיַּבָּשָׁה בְּתוֹךְ הַיָּם [f'] וְהַמַּיִם לָהֶם חֹמָה מִימִינָם וּמִשְּׂמֹאלָם

第一の枠組みと、第二の対応関係とに挟まれているのが14:19-20であり、14章の構造の中心であると考えられる。ここでは、イスラエルの民を先導していた御使いと雲の柱が後ろに移動し、御使いが光をもたらしたという「救済」が際立っている。そしてこの中心部分が、14:30-31の結論を方向づけている。すなわち結論では、「救い」「偉大な手を見た」「ヤハウェを畏れた」「ヤハウェと僕モーセを信じた」ことが語られる。

以上の構造分析により、出エジプト記14章は全体が一つに纏まっていることがわかる。そして14章の主題は「神の救いによって神が栄光を現し（vv.19-20）、その結果として人々が『神がヤハウェである』と知るようになり、神を畏れ、信じるようになる（vv.30-31）」ことであると言えるだろう。

第3章　語彙の探究

出エジプト記14章の語彙について探究し、それぞれの語彙が持つ神学的意味と14章との関係を考察する。

1. 神名ヤハウェ יַהְוֶה（出14:1,4,8,10,13,14,15,18,21,24,25,26,27,30）

BDB[16] によれば、多くの学者はיַהְוֶהを-הוה（=היה）のHiphil形として説明し、「存在させる者」、「命を与える者」、「創造者」と解する。しかし、これをהוה（=היה）のQal形とし、「存在する者」、すなわち「絶対的で不変のもの」と解する者も多い。

私見としては、創世記1:1-2:4に注目したい。1:1-2:3では、神が天地を創造され、7日目に完成される。この箇所では神名は「エローヒームאֱלֹהִים」となっており、「ある、なるהיה」という動詞が27回も繰り返される。その後に2:4にてהיהのHiphil形である神名「ヤハウェיַהְוֶה」が初めて現れる。5:2で「神が人を男と女に創造された日に祝福して人と名付けた」と記されているように、神は創造した日に「祝福して名付ける」ことが分かる。つまり、1:1-2:3では天地創造を完成させた神は第七の日を祝福し、自らを「ヤハウェ」と名付けたことが示されているのである。従って、2:4の「ヤハウェיַהְוֶה」は天地を創造した「創造主」という意味であると考えられる。

2. 風 רוּחַ（出14:21）

S.テングストロム[17] によれば、רוּחַには「風」という意味があり、神の積極的な介入と直接的に関連している。神の介入と言っても、「救済」という肯定的な意味だけではなく、「裁き」という否定的な意味も含んでいる。実際、神ヤハウェの裁きはしばしば、葉や塵、そして箕の中の籾殻を追い払う東風のイメージで表現される。

「風רוּחַ」は、救済と裁きという肯定と否定の意味の両方を含んでいるのである。出エジプト記14章では、神が風を吹かせることで水が分かれ、「救われる者」と水に飲み込まれて「滅びる者」に分けられる。神の風によって「裁き」が行われていると言えるだろう。

3. 光 אוֹר（出14:20）

S.アーレン[18] によれば、旧約聖書では一日の明るさが太陽に由来するという見解ではなく、日の光は太陽の光とは別のものと考えられていると言う。このような考え方は、創世記1章の天地創造の記述の中で明らかに前提とされており、光は明確に「日の光」と呼ばれ（創1:5）、天の光が形成される前に既に存在している（創1:14ff.）。また光は、正義（מִשְׁפָּט）とも関わっており、正義が光になる、あるいは光として出てくる。ミカ書7:8f.によれば、人間は闇の中にいることを知り、神が彼を光に導く。預言者のテキストにおいて光は正義によって達成される虐げられた人々の「救い」を表しているのである。

私見としては、創世記1:3の光も「救い」を表していると考える。天地創造の時、初めに創造されたのは物質的な光ではなく、神の裁きによってもたらされる「救いの光」なのである。出エジプト記14章の光についても、「救い」であると解するべきだろう。

4. 闇 חֹשֶׁךְ（出14:20）

「私は彼らの前にある闇を光に変える」（イザ42:16）とあるように、出エジプトと同じ現象が、バビロンからの解放である第二の出エジプトでも繰り返される。また、神とアブラハムの間の契約の儀式に暗闇があったように、律法

の授与に関連したシナイの啓示においても、暗闇は重要な役割を果たしている[19]。預言者や知恵文学のいくつかの箇所では、闇は失明や捕囚と関連付けられている[20]。従って私見では、闇は物理的な現象ではなく、比喩的に「命が生まれない状態」や「神から離れている滅びの状態」を表していると考える。

5. 雲 עָנָן（出14:19,20,24）[21]

6. 栄光を現す、頑なにする כָּבֵד（出14:4,17,18）[22]

7. 裂く בָּקַע（出14:16,21）

J. N.オズワルト[23] によると、בָּקַעの基本的な意味は「扱いにくいものを激しく裂くこと」であると言う。בָּקַעは、①内側から裂ける作用（卵の孵化など）、②日常生活で遭遇する割れる行為（木が割れるなど）、③地球が裂ける（主の再臨）、④軍隊が都市や野営地、領土に侵入する（戦争や暴力と関連）、⑤創造に関連する水の生産を表す。このような創造的な活動は、イスラエルのために行われた神の贖罪の行為と直接的に並行しているとオズワルトは言う[24]。

בָּקַעという言葉は、オズワルトが言うように「創造」と「贖罪」を表す聖書全体において非常に重要な語であることは明らかである。私見では、この言葉は更に「救い」と「解放」を表すと考える。בָּקַעは、不可能だと思われるものを引き裂くという力強い言葉であり、またいくつもの意味を併せ持つ多義的な言葉である。この語については「第5章5 絶望の中での逆説の神学」で更に論じることにする。

8. 乾いた地 יבשה（出14:16,22,29）

H.D.プロイス[25]によれば、出エジプト記14:16, 22, 29は、海を通過する間に神ヤハウェの栄光が現れたことを描写し、イスラエルが海の真ん中の「乾いた地」を通過したという記述で頂点に達している。また、洪水物語（創8:7）の中で、水の「乾き」を語っているのは祭司文書（P）であり、Pがこの語彙に特別な関心があることを示している。

私見としては、「乾いた地」は「人間が生きていくことが出来る場所」を表

しており、プロイスが言うようにPにとって特別な語であると考える。出エジプト記14章では、神がイスラエルの民を救うために「乾いた地」を創造する。「乾いた地」は、人々が生きる場所を神が創造されることを表す「創造」と「救い」が繋がっている言葉だと言えるだろう。

9. 救い יְשׁוּעָה 、救う יָשַׁע（出14:13,30）

J. F.ソーヤー[26] によると、יְשׁוּעָה の神学的用法で最も古典的なのは出エジプト記14章であり、イスラエルが葦の海でエジプト軍に大勝利を収めたことを、救い יְשׁוּעַת（v.13）と表現していると言う。この言葉はイスラエルから苦難を取り除く出エジプトではなく、イスラエルの民がいるところに神の助けが来るという意味で使われている[27]。

救いは「苦難を取り除くのではない」というソーヤーの視点は重要である。私見では、「救い」は、苦難の中に神が介入する「神の勝利」であると考える。民数記における青銅の蛇の物語においても、イスラエルの民は炎の蛇を取り去ってくださるよう願ったが、神は蛇を取り去ることはなく、青銅の蛇を見上げることで生き延びることが出来るようにされた。救いは確かに与えられるが、苦難は取り除かれずに続くのである。従って「救い」とは、苦難は続くにもかかわらず、神が介入し続けるという逆説的な「神の勝利」の言葉であると言えるだろう。そして、それは信仰を持ち続けることにも繋がっている。

第4章　出エジプト記14章「海の奇跡」の神学

この章では、出エジプト記14章がどのような神学に基づいて描かれているのかを論じたい。1では14章と同じ祭司文書である創世記「天地創造」「洪水物語」との共通点を探究し、2~4では14章における祭司文書の特徴的な表現と神学について考察する。

1. 出エジプト記14章の創造論

1.1 創世記1章「天地創造」との共通点

創世記1章1節から2章4節前半までは祭司資料（P）であり[28]、出エジプト記14章と比較すると、第3章で取り上げたいくつかの語彙（風 רוּחַ, 光 אוֹר, 闇 חֹשֶׁךְ, 乾いた地יבשה）が共通して用いられていることがわかる。T.レーマーが「出エジプト記14章は明らかに創世記1章に遡り（創7-8章Pにも）、世界の創造とイスラエルの創造を並行して描いている。」[29] と論じているように、創世記1章と出エジプト記14章はPによって並行して書かれたものだと考えられる。

第一に共通しているのは「分ける」という概念である。創世記では1:4で、神は光と闇を分けた。その後も、大空の下の水と上の水を分け（創1:6）、水と乾いた地に分けた（創1:9）。この「分ける」という概念は、天地創造で重要な意味を持っていることがわかる。出エジプト記では2箇所で「分ける」という行為がなされる。まず14:20では、雲がイスラエルの民の背後に移動して、イスラエルの民とエジプト人を分けた。御使いはイスラエル側に光を照らし、エジプト側は雲によって闇となる（cf.「第1章2 訳注・本文批評的注」）。更に14:21では海の水が裂かれることで「分ける」という行為がなされる。

この「分ける」という概念と共にある重要な語は「風　רוּחַ」である。創世記1:2は聖書協会共同訳では「神の霊」が水の面を動いていると訳されているが、NRSVでは「神の風」と訳している。「第3章2 風 רוּחַ」で述べたように、רוּחַには「裁き」の意味があることから、1:2の「神の風」は光と闇に分ける「裁き」を行っていると考えられる。出エジプト記14章では20節で、御使いによってイスラエルとエジプトは闇と光に分けられていることから、ここでもרוּחַは「裁き」を表していると考えられる。Pにおいては創世記、出エジプト記共に、רוּחַによって「裁き」が起こり、光がもたらされるのである。

第二に、「光がもたらされる」という点が共通している。既に述べたように、רוּחַによって「裁き」が起こる時に、光がもたらされる（創1:3, 出14:21）。私見では「第3章3 光 אוֹר」で述べたように、「光」は物質的な光ではなく、神が裁きを行われた後に創造された光、すなわち「救い」であると考える。

第三に神が「乾いた地」を創造されたという点が共通している。レーマーは「乾いた地　הַיַּבָּשָׁה」が、出エジプト記14章16節,22節,29節と創世記1章9-10節に、これから誕生する生命体にとって必要となる乾いた土地の基礎として描かれていると論じている[30]。レーマーが言うように、「乾いた地」は創世記と出エジプト記において共通している重要な言葉であり、創世記においては「命が生まれる場所の創造」を表している。

出エジプト記では、神ヤハウェを礼拝するためにイスラエルの民はエジプトを脱出した。その際に、イスラエルの民が救われるために神が水を切り開いて創造された道がこの「乾いた地」であった。従って、出エジプト記14章において「乾いた地」とは、「神の民を創造する道」すなわち「礼拝共同体の創造の道」を意味していると言えるだろう。

以上三つの共通点に加えて、最後に注目したいのは、神の言葉と創造のパターンが共通して見られることである。R.W.クラインは、創世記1:3-5は緊密に構成された一つのパターンを成しており、それが章全体に繰り返されていると言う[31]。そのパターンとは、①宣言定式「神は言われた」(v.3)、②命令「光あれ」(v.3)、③実現「すると光があった」(v.3) である。このように何か特別なことが起こる時には、あらかじめ必ず神の言葉が発せられるというのが祭司文書の見解なのだとクラインは論じている[32]。出エジプト記14章においても、この「神の言葉 – 実現」パターンが繰り返されている。すなわち、①宣言定式「ヤハウェはモーセに言った」(v.15)、②命令「海を裂きなさい」(v.16)、③実現「水が裂かれた」(v.21) などである。このパターンは、次に考察する「洪水物語」にも繰り返される。

以上のことから、Pが「天地創造」と「海の奇跡」において共通して伝えているのは、神の言葉によって「裁き」が行われ、「救い」が創造される、その救いによって「命が生まれる」つまり「神の民（礼拝共同体）が創造される」ということである。

1.2 創世記6－9章「洪水物語」との共通点

次に、創世記6－9章「洪水物語」との共通点について考察したい。

第一に、「洪水物語」においても、第3章で取り上げた語彙 （風 רוּחַ, 雲 עָנָן, 裂く בָּקַע, 乾いた יָבֵשָׁה [33]）が共通して用いられている。また1.1で述べたように、①宣言定式「主はノアに言われた」（創7:1）、②命令「箱舟に入りなさい」（創7:1）、「私は四十日四十夜、地上に雨を降らせ、造ったすべての生き物を地の面から消し去る」（創7:4）、③実現「大いなる深淵の源がすべて裂け、天の窓が開かれた。雨は四十日四十夜、地上に降った」（創7:11-12）というP特有の「神の言葉－実現」パターンが出エジプト記14章と共通している。

第二に、「裁き」と「救い」のモチーフが共通している。K.シュミートは出エジプト記14:28aの水がファラオの全軍を覆ったという表現が、創世記7:19-20における洪水の水が地上を覆ったことと文学的に非常に類似していると指摘し、エジプト人が海で滅ぼされたことは大洪水で罪深い生き物が根絶されたことに等しく、エジプト人の消滅は神の創造的世界秩序の確立における一要素であると論じている[34]。

シュミートが言うように、出エジプト記14章においてもファラオの暴虐によって混乱が起こり、そこに神が介入する。神の介入によって行われるのは「裁き」である。洪水物語では神の宣言の後に、「大いなる深淵の源がすべて裂けた（בָּקַע）」（創7:11）。この「裂ける בָּקַע」という言葉は、出エジプト記14:16,21の「海が裂ける（בָּקַע）」と同じ言葉が使われている。「第3章7 裂く בָּקַע」で述べたように、この言葉は、不可能と思えるものを引き裂く強大な力を示す言葉であり、「創造」と「贖罪」、「救い」と「解放」を指し示している。洪水が起こった後に、神はノアを御心に留め、「風 רוּחַ」を吹かせて水を引かせる（創8:1）。1.1で考察した「風 רוּחַ」と同様に、ここでも神が吹かせた風によって、救われる者と滅びる者に分ける「裁き」が行われるのである。

第三に、「戻る שׁוּב」という語の繰り返しに注目したい。洪水の後、創世記8:3-12では水が地上から徐々に引いていき、ノアが地上から水が引いたことを知るところまでが語られる際、「戻る שׁוּב」という言葉が繰り返される（創8:3,7,9,12）。同様

に、出エジプト記14:26-28において、イスラエルを追ってきたエジプト人を海が呑み込んだことが語られる際にも「戻る שוּב」が繰り返される（出14:26,27,28）。これは「水が戻る」という意味であるが、「神のもとへ帰る」という意味も含んでいるのではないだろうか。箱舟から出た後、ノアが最初に行ったことは祭壇を築き、いけにえを献げて礼拝することだった。出エジプトの出来事も、荒れ野で3日の道のりを行き、いけにえを献げるために成し遂げられた。どちらも「神のもとへと帰る」、つまり神を礼拝する者とされることを描いているのである。

以上から、「洪水物語」との比較においても、出エジプト記14章の神学的主題は、神の裁きによる「救い」の創造と神のもとへの立ち帰り、すなわち「神の民（礼拝共同体）の創造」であることは明らかとなる。

2. 荒れ野の神学

出エジプト記全体において重要なキーワードは「荒れ野」である。大住雄一は、出エジプト記全体の主題が「礼拝」であり、出エジプトはシナイ山での礼拝に向かって進行していると言う[35)]。確かにその通りであるが、ならば何故、礼拝の場所として「荒れ野」が選ばれたのだろうか。

「荒れ野 מִדְבָּר」という言葉は、旧約聖書全体では270回用いられているが、そのうち105回が五書である（創7回, 出27回, レビ4回, 民48回, 申19回）。特に出エジプト記と民数記では、「荒れ野」が繰り返され、強調されている。S.タルモンによると「荒れ野」とは、まだ原始の混沌の状態にあるか、人間の罪に対する神の罰として再びそのような混沌に陥った状態を表す。そして、荒れ野は恐怖と反感を呼び起こすと言う[36)]。

タルモンが言うように、出エジプト記14章ではエジプト人が迫ってくるのを見たイスラエルの民が恐怖に襲われ混沌に陥った状態となっている。荒れ野で命が危険に晒された時、イスラエルの民は恐れ、神を信じることができずに叫ぶ。そのような絶望的な状況で神が栄光を現され、滅びる直前のところで民が救われる。混沌と不信、絶望という否定的な状況の中でこそ神が栄光を現し、神により頼まなければ生きていけない状況になる時に「礼拝」が起こるのであ

る。それゆえに礼拝の場所は、絶望の場所である「荒れ野」でなければならないのだ。

3. 栄光の神学

「第2章 構造分析」で明らかにしたように、「私が栄光を現すとき、私がヤハウェであることを知る」（出14:4,18）は前半の枠組みとなっており、14章の結論へと導く重要な箇所である。ここでは、神が栄光を現すことの意義について考察したい。

3.1 栄光を現す

栄光は荒れ野において現される。左近は祭司文書における「主の栄光」という神学概念について、主の栄光が現れる前には必ず「民の反抗」があること、そして栄光は、破れ、混乱する世界に現れ、それは必ず礼拝の場と結びついていると論じている[37]。神ヤハウェを主語としてכָּבֵדのNiphalが登場する箇所である「私が栄光を現すとき、私がヤハウェであることを知る」（出14:4,18）は特別な位置づけにあり、神ヤハウェがご自分の力を知らしめるために軍事的介入が行われる。

以上のことから考察すると、「神が栄光を現す」とは、混乱の中で神が戦うことである。14:14でモーセが「ヤハウェがあなた方のために戦われる。だから、あなた方は静かにしていなさい。」とイスラエルの民に命じた後、神が海を裂いて創造した乾いた地をイスラエルは「沈黙」して通っていった。左近はモーセの言葉について、「静まり返った沈黙の時があり、その時には神がたった独りで血をあびて戦うという意味なのだ」[38]と言っている。「神が栄光を現す」とは、混乱の只中で、神ヤハウェがたった独りで戦われ、民が沈黙して神に従うことを意味しているのである。

3.2 私がヤハウェである

神が栄光を現された結果起こる出来事がもう一つある。それは「私（神）がヤハウェであることを知るようになる」ことである。「私がヤハウェである אני יהוה」という

言葉が用いられている箇所を調べると、五書では創世記（2回）、出エジプト記（17回）、レビ記（52回）、民数記（8回）、申命記（1回）であり、レビ記が突出していることがわかる。レビ記では、様々な規定の終わりに「私がヤハウェである（אני יהוה）」を繰り返す。

「第3章1　神名ヤハウェ」で述べたように、「ヤハウェ　יְהוָה」は「創造主」という意味であると考えられる。レビ記において「私がヤハウェである」と繰り返すのは、神ヤハウェが全てをお造りになる「創造主」であることを民に想起させるためだったのだろう。礼拝にて律法が朗読されることで、イスラエルの民は「神がヤハウェである」、すなわち「創造主」であることを何度も想い起こしたのではないだろうか。

以上により、出エジプト記14章において「私がヤハウェであることを知るようになる」とは、神ヤハウェこそが「創造主」であることを「想起する」ことであると考えられる。栄光を現された後、イスラエルの民は応答として創造主なる神を想起する。その行為が「礼拝」であり、Pはそのために「私がヤハウェである（אני יהוה）」を繰り返したのだろう。

4. ヤハウェとその僕モーセを信じた

「第2章　構造分析」で論じたように、14章の結論は「彼らはヤハウェと彼の僕モーセを信じた。（14:31）」（יַאֲמִינוּ בַּיהוָה וּבְמֹשֶׁה עַבְדּוֹ）である。これが14章の主題であると考えられるが、ではここで言う「信じる」とは何を意味するのだろうか。

「信じた　יַאֲמִינוּ」という言葉は、אָמַן（信じる）のHiphil・未完了・三人称・男性・単数形のwaw継続法である。אָמַנのHiphil形の解釈についてフォン・ラートは、「ヘブライ語では、『信仰を持つ』とは文字通り『ヤハウェの内に自分を安心させること』である、だからהֶאֱמִין（אָמַנのHiphil形）の後にבְּという前置詞がある」[39] と言っている。そこで旧約聖書中で、「אָמַנのHiphil形＋前置詞　בְּ＋ヤハウェ　יהוָה」が用いられている箇所を調べてみると5箇所（創15:6, 出14:31, 申1:32, 王下17:14, 歴下20:20）であり、この内で「神を信じた」と肯定的に用いられているのは、上記の出エジプト記14:31と創世記15:6「アブラムは主を信じた。（ וְהֶאֱמִן בַּיהוָה ）」の2箇所のみであることが分かる。旧約聖書で二度しか用いられていないということから、この

表現が特別な位置づけにあると言えるだろう。

創世記15章で神ヤハウェは、自分から子孫が生まれることを信じないアブラムを外に連れ出し、「天を見上げて、星を数えることができるなら、数えてみなさい。」（創15:5）と告げた。アブラムは神の創造のみ業を見て立ち尽くし、神ヤハウェの圧倒的な力に身を委ねた。それが「信じる」ということなのである。出エジプト記14章においても、海を裂き、エジプト人を水の底に沈めた神ヤハウェの強大な力を見てイスラエルの民は畏れ、信じた。「信じる」とは、神ヤハウェが「創造主」であることを思い知らされることによって神を畏れ、沈黙して神に従うことなのである。これは「3.1 栄光を現す」で述べたことに通じている。

第5章　捕囚期の神学

この章では14章が編纂された歴史的状況から解釈してみたい。バビロン捕囚は国家の壊滅をもたらしただけでなく、神殿が灰燼に帰して神の現臨の場を失い、神の契約が破棄され、頼るべきものが無くなってしまうという深い内面的な崩壊をもたらした[40)]。全てを失った絶望的な状況の中で、それでも神を礼拝し、神を信じ続けた捕囚期の神学とは如何なるものだろうか。14章のテキストを初めから辿りながら、捕囚期に語られた祭司文書（P）の神学を更に探究したい。

1. 偶像崇拝への警告

14章は「バアル・ツェフォンの前で、あなたは海のそばでそれに面して宿営しなければならない。」（出14:3）という神ヤハウェの命令で始まる。バアル・ツェフォンは、場所を意味するだけではなく、『ツェフォンの主』という神についても言及されており[41)]、イスラエルの民がツェフォンに対峙して宿営するように命じられていると考えられる。異教の神を選ぶのか、神ヤハウェを選ぶのか、試されているのである。

2. 神の言葉、神への畏れの忘却[42)]

3. 恐れるな、ヤハウェの救いを見よ、神が戦われる

「第3章9 救い」で指摘したように、「救い」とは苦難の中に神が介入し続ける継続的な神の勝利を意味する言葉である。つまりここでは、「神の勝利を見よ、神が戦われるのだから」と言われている。戦うのは人間ではなく、異教の神と神ヤハウェの対決なのだ、だから黙って神の勝利を見ていよと言うのである。

捕囚民たちは、戦争に負けたということは神が負けたということであり、すなわち神が死んだということだと考えた[43)]。そのような民に向かってPは14章の物語を通して、神が死んだのではなく、生きておられる神が戦われることによって救われるのだと知らせている。神が戦う異教の神は動くことの出来ないただの偶像であり、神が敗北することはありえない。従って、イスラエルが捕囚になったのは神が異教の神に負けたのではなく、民が「静かにしている」（出14:14）ことが出来ず、預言者に聞き従わずに自分達で戦った結果であることを告げているのである。Pはかつてのモーセの姿と、捕囚以前に偶像崇拝を批判し続けた預言者たちの姿とを重ね合わせ、今、バビロン捕囚が人間の罪による裁きの結果であることを語っていると考えられる。

4. 神の言葉は実現する

「第4章1 出エジプト記14章の創造論」において、「神の言葉 – 実現」パターンが繰り返されることを論じた。Pの神学において重要なのは、特別な出来事は「神の言葉」によって行われているということである。それは例えば、ノアの洪水（創6:13-21）や、アブラハム契約（創17章）、モーセの召命（出6章）、エジプトの災い（出7章以下）、葦の海の横断（出14章）、幕屋の建造（出25章以下）などである[44)]。左近によれば、神の命令と実現を繰り返す手法は「神の命令（言葉）は必ず実現する」という信仰の戦いの言葉であると言う[45)]。

私見では、Pはこれらの重大な出来事が神の言葉の実現であると伝えること

を通して、神が「創造主」であることを聞く者に確信させ、神ヤハウェが唯一神であることを強調していると考える。Pが「創造主」を強調するのは、捕囚期に神ヤハウェが唯一神であることを訴える必要に迫られたからだろう。

「第4章3.2 私がヤハウェである」で、「私がヤハウェである（אני יהוה）」の繰り返しは、創造主なる神を想起する行為であり、それが礼拝であることを述べた。捕囚期の異教に囲まれている捕囚民たちの生活の中で、「私がヤハウェである」という信仰告白を繰り返すことによって、神ヤハウェが唯一神であることを貫き通し、信仰を守ろうとしたのだろう。

5. 絶望の中での逆説の神学

14章の中心部分である14:19から最後の結論に至るまでの神学について考察する。私見では、この部分は「逆説」の連続によって語られていると考える。ここで語られる逆説とその意義について考えたい。

14:19では突然神の御使いが現れ、ここで初めて御使いがイスラエルの民を先導していたことが明らかにされる[46)]。14:19では御使いが裁き主となり、イスラエル側には光を与えて前に進ませ、エジプト軍は闇の中に置く。ここには、力のないイスラエルに「光」を与え、強大な力があり勝利するに違いないと思われるエジプトを「闇」に定めるという逆説がある。

次に14:21の「裂く בָּקַע」という言葉に注目したい。この語は「裂く」という動作を表す一方で、軍隊が領土に侵入する際に用いられる暴力と関連する言葉でもある。オズワルトによると、捕虜や幼い子供たちはしばしば高いところから投げ落とされて下にあった岩の上で「裂かれ」（王下8:12 ; 歴下25:12）、妊娠中の女性は「引き裂かれる」（王下15:16 ; アモ1:13）ことがあまりにも一般的だったと言う[47)]。これらのことから、「裂く בָּקַע」という言葉は、捕虜や子供、妊婦の体が引き裂かれたという恐ろしい記憶を呼び起こす「死」の言葉であったと考えられる。その一方で、14章ではイスラエルの民を救うために海が裂かれる時にこの言葉が使われる。つまり בָּקַע は、「死」と「生」という全く逆のイメージが同時に想起される逆説的な言葉なのである。

14章の終わりでは、イスラエルが海辺でエジプト人たちが死んでいるのを見る。プロップによると、14:30はナイル川でヘブライ人の男子を溺れさせるというファラオの計画（出1:22-2:10）を思い起こさせると言う[48]。神ヤハウェはその復讐としてエジプトの兵士たちを海に沈め、モーセは「水から救う者」（出2:10）という彼の名前の語源に従って海からイスラエルを救った[49]。おそらく捕囚民たちは海の奇跡の物語を聞く時、捕囚で殺された大勢の者たちのことを想い起こしただろう。そして、この物語のように絶望の記憶を神が覚えていてくださって必ず報いてくださる、救ってくださるという希望を抱いたに違いない。

絶望からイスラエルの民の救いを導いたのはモーセであった。罪を犯したモーセは神の僕となり、神と共にイスラエルの救いを成し遂げた。そして、奴隷であったイスラエルの民は、神の民とされた。Pは出エジプト記14章を徹底して「逆説の神学」で描いているのである。

捕囚期、祭司たちは捕囚となったイスラエルの民の疑問に答える必要があった。なぜ神の民であるイスラエルが捕囚となり、絶望的な状況に追い込まれたのか、神はイスラエルを見放されたのか。祭司たちはその原因を知るために、それまでに伝えられてきた資料あるいは伝承によって神の出来事を検証したのではないかと思われる。そこで神の御業の逆説性に気づいたのではないだろうか。そして祭司たちは、捕囚期に神の御業の逆説性を強調して出エジプト記14章を編纂し、なぜ捕囚になったのかという疑問に答えようとしたのだろう。祭司たちはこの疑問に答えることで、イスラエルの民に希望を指し示したのである。捕囚という神の裁きは、救済をもたらす恵みの手段であったのだ。この「逆説の神学」は捕囚期において絶望している者たちに、神の御業が逆説的であることを明らかにすることを通して、絶望こそが神の御業のはじまりであり、絶望から必ず救い出されることを確信させる希望の神学なのである。

結論

以上において、出エジプト記14章「海の奇跡」の神学的主題を考察し、更に編纂された捕囚期の神学についての探究を行った。14章を文書仮説によってではなく最終形態で解釈することによって、新たな発見を得ることができた。それは、14章の神学的主題が「神の裁きによって救いが創造され、神の民（礼拝共同体）が創造される」ということである。

14章は、絶望の中で神を信じ続ける祭司たちが、神から離れていく捕囚民たちに向かって、神が裁きをもって救いを創造されたことを告知するための言葉なのである。エルサレム崩壊後、神ヤハウェが負けた、あるいは死んだと考え、異教の神へ向かった捕囚民たちは、自らの罪によって裁かれ滅びに至る運命にあった。にもかかわらず、神ヤハウェは捕囚民たちを見捨てることなく絶望の状況に介入し、救い出された。これこそまさに、裁きが救いとなる「逆説の神学」なのである。この「逆説の神学」は、絶望が救いのはじまりであることを示し、絶望の淵には必ず救いの光がもたらされること、創造主なる神の絶大な力によって勝利することを証する。絶望は希望へと逆転するのである。「海の奇跡」の物語は、神から離れていく者たちを目覚めさせ、神ヤハウェこそが唯一の神であることを確信させて、礼拝へと立ち返らせる。「海の奇跡」は、救いと神の民の創造の言葉であり、捕囚期における神の民の回復の言葉であるのだ。

更に「海の奇跡」の神学の探究によって、驚くべきことに気付かされる。それは、ここには聖書全体の神学が凝縮されているということである。第4章にて、「海の奇跡」と「天地創造」、「洪水物語」が並行して描かれていることを論じたが、これは新約聖書における「イエス・キリストの十字架」にも同じことが言える。マルコによる福音書15章33節以下では、昼の12時から3時まで闇となる。主イエスは闇の中、沈黙されている。「海の奇跡」で、モーセに「静かにしていなさい」と言われたイスラエルの民が沈黙して神の言葉に従い、静

けさの中で神ヤハウェがたった独りで戦われている姿と重なり合う。3時になると主イエスは大声を出して息を引き取られ、神殿の幕が真っ二つに裂けた。ここでは、14章で海が真っ二つに裂かれたのと全く同じ言葉が使われている[50]。そして、そこに光がもたらされた。マルコによる福音書15章33節には「全地は暗くなり、三時に及んだ。」と書かれており、三時に闇が終わったことがわかるが、その後で光が差し込んだとは書かれていない。主イエスの死が、光だからである。この時神は、罪のない御子イエス・キリストを裁かれ、主イエスの壮絶な絶望と死によって、救いの光を創造されたのである。その救いの光は、この世のすべての者を神の民とする創造の御業であり、全地を絶望から希望へと逆転させる。

ルターは、キリストの十字架を信仰の中心として受け止め、およそ栄光とはかけ離れたみじめで無残な主イエスの姿こそ、神の恵みとみとめることから始まる神学を「十字架の神学」と呼んだ[51]。キリストの十字架は、光が闇となり、人となった神の子が罪がないにもかかわらず裁かれ、人を救い続けてきたがゆえに有罪とされ、決して死ぬはずのない神が殺されるという逆説に満ちている。ルターが言うように、「無惨な主イエスの姿こそ神の恵みである」という理性では到底理解することが出来ない神の逆説を受け入れる時、逆転が起こる。絶望が希望へと逆転し、神を信じる者が生まれるのである。

出エジプト記14章「海の奇跡」の神学は、まさに「十字架の神学」であり、聖書全体を貫く「神の創造と逆説の神学」である。それはすべての時代の「現在」に語りかける、絶望を救いへと逆転させる希望の神学なのである。

（さかぐち・ゆき）

注

1） 大住雄一「救済と創造－大震災を経て創造論を再考する－」『神学』73号（東京神学大学神学会, 2011年）, 30頁。

2） B.F.バックストン『創造と堕落 創世記霊解』（バックストン記念霊交会, 1960年）,

6頁。

3） 字数制限のため割愛する。

4） 私訳。

5） William H.C. Propp, *Exodus 1–18*, The Anchor Yale Bible.（New Haven: Yale University Press, 1974）, 498.

6） フランシスコ会聖書研究所『聖書 フランシスコ会研究所訳注』（サンパウロ, 2011年）,（旧）145頁。

7） R.N. ワイブレイ『モーセ五書入門』山我哲雄（訳）,（教文館, 1998年）, 30-37頁。

8） 左近淑『旧約聖書緒論講義』（教文館, 1998年）, 152頁。

9） 前掲書, 154-156頁。

10）マルティン・ノート『ATD旧約聖書註解2 出エジプト記』木幡藤子・山我哲雄（訳）,（ATD・NTD聖書註解刊行会, 2011年）, 8-15頁。

11）R. レントルフ『モーセ五書の伝承史的問題』山我哲雄（訳）,（教文館, 1987年）, 271-274頁。

12）ノート, 前掲書, 164-165頁。

13）前掲書, 170頁。

14）関根正雄『関根正雄著作集 第4巻 旧約聖書序説』（新地書房, 1985年）, 292-293頁。

15）左近淑「崩壊期の思想としての旧約聖書－祭司文書の場合－」『左近淑著作集 第1巻 学術論文集』（教文館, 1992年）, 263頁。

16）Francis Brown, S.R.Driver. and Charls A.Briggs. *A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament. with an appendix containing the biblical Aramaic.* (Oxford: Clarendon Press, 1907), s.v. “הָוָה”, 218.

17） S.Tengström, s.v. “רוּחַ”, In *TDOT*, Vol.13, ed.by, Botterweck, G.Johannes, Helmer Ringgren, and Heinz-Josef Fabry（Grand Rapids, MI: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 2004), 381-382.

18）S. Aalen. s.v. “אוֹר”, In *TDOT*, Vol.1, ed.by, Botterweck, G.Johannes, Helmer Ringgren, and Heinz-Josef Fabry (Grand Rapids, MI: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1974), 151-152.

19） H. Ringgren. s.v. “חָשַׁךְ חשֶׁךְ חֲשֵׁכָה חָשׁוֹךְ מַחְשָׁךְ”, In *TDOT,* Vol.5, ed.by, Botterweck, G.Johannes, Helmer Ringgren, and Heinz-Josef Fabry (Grand Rapids, MI: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1986), 250.

20）Ibid., 252-253.

21）字数制限のため割愛する。

22）字数制限のため割愛する。

23）John N. Oswalt, s.v. “בָּקַע”, In *Theological wordbook of the Old Testament* Vol.1, ed.by, R. Laird Harris, Gleason L. Archer, Jr., and Bruce K. Waltke (Chicago: Moody Press, 1980), 123-124.

24）Ibid.

25）H.D. Preuss, s.v. “יָבֵשׁ יַבָּשָׁה יַבֶּשֶׁת”, In *TDOT*, Vol.5, ed.by, Botterweck, G.Johannes, Helmer Ringgren, and Heinz-Josef Fabry (Grand Rapids, MI: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1986), 379.

26）J. F. Sawyer, s.v. “ישע הוֹשִׁיעַ יְשׁוּעָה יֵשַׁע יֶשַׁע מוֹשָׁעוֹת תְּשׁוּעָה”, In *TDOT*, Vol.6, ed.by, Botterweck, G.Johannes, Helmer Ringgren, and Heinz-Josef Fabry (Grand Rapids, MI: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1990), 450.

27）Ibid.

28）W.H. シュミット『旧約聖書入門（上）』木幡藤子（訳）,（教文館, 1994年）, 153頁。

29）Thomas Römer. “From the Call of Moses to the Parting of the Sea.” In *The book of Exodus : composition, reception, and interpretation*, edited by Thomas B.Dozeman, Craig A. Evans, Joel N.Lohr (Leiden: Brill, 2014), 146.

30）Römer, op.cit., 146.

31）ラルフW. クライン『バビロン捕囚とイスラエル』山我哲雄（訳）,（リトン, 1997年）, 212頁。

32）同上。

33）「乾いた יָבֵשָׁה」は第3章で取り上げた「乾いた地 יבשה」の語彙素である「乾く יָבֵשׁ」のQal・完了・女性・単数形。

34）Konrad Schmid. “Exodus in the Pentateuh.” In *The book of Exodus : composition, reception, and interpretation*, edited by Thomas B.Dozeman, Craig A. Evans, Joel N.Lohr (Leiden: Brill, 2014), 35.

35）大住雄一「神の臨在の保証－出エジプトの目的とモーセの派遣」『神学』63号（東京神学大学神学会, 2001年）, 50-51頁。

36）S. Talmon, s.v. “מִדְבָּר עֲרָבָה”, In *TDOT*, Vol.8, ed.by, Botterweck, G.Johannes, Helmer Ringgren, and Heinz-Josef Fabry (Grand Rapids, MI: Wm. B. Eerdmans Publishing

Co., 1997), 90-91.

37）左近『旧約聖書緒論講義』211頁。

38）左近淑『神の民の信仰 旧約篇』（教文館, 1996年）, 36頁。

39）A. Jepsen, s.v. “אָמַן אֱמוּנָה אָמֵן אֱמֶת”, In *TDOT*, Vol.1, ed.by, Botterweck, G.Johannes, Helmer Ringgren, and Heinz-Josef Fabry (Grand Rapids, MI: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1974), 298.

40）左近「崩壊期の思想としての旧約聖書」263頁。

41）Paul Michael Kurtz, s.v. “Baal-Zephon”, In *Encyclopedia of the Bible and its reception*. Vol.3, ed.by, Hans-Josef (Klauck, Berlin: De Gruyter, 2010), 230.

42）字数制限のため割愛する。

43）左近『神の民の信仰 旧約篇』144頁。

44）クライン, 前掲書, 212-213頁。

45）左近「崩壊期の思想としての旧約聖書」266頁。

46）14章以前に神の御使いが現れるのは、3:2のモーセが神の山ホレブに行った際に燃え上がる柴の炎の中に現れた時のみである。それ以降14章までは神の御使いの記述はない。

47）Oswalt, op.cit., 123-124.

48）Propp, op.cit., 502.

49）Ibid.

50）出14:21「水が裂かれた」は、七十人訳では「ἐσχίσθη τὸ ὕδωρ」と訳されている。マルコ15:38「神殿の幕が裂けたτὸ καταπέτασμα τοῦ ναοῦ ἐσχίσθη」においても、出エジプト記と全く同じ「裂けたἐσχίσθη」（σχίζωのアオリスト・三人称・単数・直接法・受動態）という言葉が用いられていることは注目に値する。

51）徳善義和『マルティン・ルター －ことばに生きた改革者』（岩波書店, 2020年）, 52頁。